

## 〔研究ノート〕

# 2019年度スタディスキルⅡの授業報告

## Study Skills Ⅱ (2019)

中村学園大学 流通科学部

音 成 陽 子・近 江 貴 治・手 嶋 恵 美・橋 本 敦 夫  
日 野 修 造・福 沢 健・前 嶋 了 二・水 島 多美也

### I. はじめに

我が国の高等教育はグローバル化や AI や IoT などの技術革新の普及、グローバル化の進展など急速な社会変化に対応すべく、新たな価値を創造していく力を育成することが必要としている。これらのことは、文部科学省（2017）による学習指導要領の改編、大学入試の改革など高大接続改革にもみることができる。そこでは、「学力の3要素（1. 知識・技能、2. 思考力・判断力・表現力、3. 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）」を義務教育、高校教育を経て、大学教育で更なる伸張を図るとしている。

大学においては、50%を超える大学進学率、高等学校における教育内容の多様化、社会人学生や留学生の入学など、学生の質が多様化していることは周知の事実である。このような学生に対応するために、初年次教育<sup>注1)</sup>を行うことで学問や大学教育全般に対する動機付けを行っている大学は、2016年時点で579大学（79%）となっている。

中村学園大学流通科学部では2019年度より新カリキュラムを施行した。これまで1年次前学期のみだったアカデミックリテラシーをスタディスキルⅠと名称変更し、大学や学部での学修全般への導入科目とした。さらに、専門教育開始学年まで延長すること、専門教育の導入教育となること、グループワークやプレゼンテーションなどのアクティブラーニングを行うこと

などを目的にスタディスキルⅡを初年次教育に配置した。

### Ⅱ. 本科目の概要

#### 1. 位置づけ

流通科学部での学修に必要な基本的能力、特に、Academic Literacy を身につける科目として位置づけられる。そのため、1年次後学期の必修の演習科目（1単位）である。

#### 2. テーマ

流通に関わる課題について、チームで情報を収集・分析し、それらを論理的に考え、問題解決できる基礎的能力の向上を目的とする。

#### 3. 到達目標

- 1) 文献を読んで、要約することができる
  - ・論文、新聞、書籍の検索ができる
  - ・テーマ、キーワード、課題・問題点をつかむことができる
  - ・指定された文字数で要約文を作成できる
- 2) 要約した文章をもとに、説得力のある発表ができる
  - ・発表に必要な資料を作成できる（資料、ポスターなど）
  - ・論理的で説得力のある発表ができる（わかりやすさ、事実など）
- 3) 質疑応答ができる
  - ・疑問点、質問事項、要点などのメモをと

- りながら聴くことができる
  - ・発表や意見の内容の優れた点を指摘できる
  - ・自分の意見を持ち、共通点、相違点、理由を述べることができる
  - ・質問や指摘に対して、データや資料を提示しながら的確に答えることができる
- 4) 1)～3)をもとに、レポートを作成できる
- ・構成、論理性、事実、自分の意見・主張、文章にすることができる

### Ⅲ. 授業展開（表1）

15回の授業展開を表1に示した。

#### 1. 学生の活動

##### 1) グループ構成

授業展開は、学生グループワークを中心に実施した。クラスは8クラスあり、一人の教員と6グループ（1グループあたり5～6人）で構成した。課題1と課題2ではメンバーを入れ替えて実施した。課題1のグループメンバーは、学籍番号で自動的に決められたが、男女比は考慮した。課題2のグループは、課題1と重複しない新しいメンバーとした。（表2）

##### 2) グループワーク

課題解決のヒントとなる教員によるアドバイス講義に対し、グループのメンバーが分担して参加し、グループに戻って教え合い（ジグソー<sup>注2)</sup>、図1）を実施した。ここで学んだことをもとに、学生は現地調査やWeb調査などを行い、ブレーンストーミングやKJ法を用いて各自の考えを取りまとめていった。その後、ポスターによるプレゼンテーション、ピア・レスポンス<sup>注3)</sup>によるレポート作成を行った。グ

ループワークに際して、Microsoft Teamsを活用するグループも見受けられた。グループワークを困難とする学生においては、KJ法やMicrosoft Teamsの活用によって、一定の距離を保ちつつ参加できるように配慮したといえるが、十分ではなかったかもしれない。

プレゼンテーションの手順について、課題1は各グループ1回10分間程度で3回実施し、他クラス学生による相互評価を行った。課題2は外部の方も参加できる公開とし、質疑応答の時間を設けたため、各グループ15分間程度で2回実施した。プレゼンテーションを複数回行うことで、プレゼンテーション能力は、少なからず向上がみられたのではないかと考えられる。

なお、プレゼンテーションは、前学期に実施したスタディスキルⅠにおいて、自クラスでの発表・評価を経験している。これを受けて、他クラスと合同のプレゼンテーションを行った。本科目の履修後には、スタディスキルⅢ、スタディスキルⅣ、スピーチプレゼンテーションなどの科目がカリキュラムに配置されている。このように、本学部では履修カリキュラムの進行によって、プレゼンテーションの機会を確保し、スキルアップを目指している。これらの教育効果については、別途、報告を待ちたい。

レポート評価について、課題1は課題2の最初のグループワークとして、ピア・エディティング<sup>注4)</sup>による相互評価を行った。評価には事前にループリックを示し、それをもとに学生同士で評価を行った後、教員が確認をした。学生にとって、この手順を踏むことで最終課題となる課題2のレポート作成の不安を軽減できたのではないかと推察できる。そして、課題2のレポートは課題1と同じループリックを用い、教員が評価した。

表 1 授業展開

1回目	全体ガイダンス 課題1「世の中の変化とコンビニの商品戦略」の提示 解題「大手3社の現状」 PB商品・限定商品・コラボ商品・少子高齢化対策対応 など クラスガイダンス
2回目	アドバイス講義（2分割講義） ①現地調査：アポイントメント、質問リスト、マナー、服装など ②その他の調査：Web、文献、新聞記事など グループワーク（ジグソー、役割分担、各種調査など）
3回目	アドバイス講義（3分割講義） ①裏側からみる商店街（とコンビニ）～立地と物流～ ②企業の健康診断－B/S・P/Lから読み解く方法－ ③売上高データを経営に役立てよう 仮想データ8商品程度の売上高を活用してABC分析 グループワーク（ジグソー、各種調査など）
4回目	グループワーク（調査と発表準備）
5回目	グループワーク（調査と発表準備）
6回目	課題1のポスター発表（2クラス合同）と学生による相互評価
7回目	課題2「福岡市内の商店街の現状と課題」 外部講師による講話「福岡市内の商店街について」
8回目	グループの改編とグループワーク ・課題1のレポート提出と学生による相互評価 （ピア・レスポンス&ピア・エディティング） ・役割分担、各種調査など
9回目	アドバイス講義（2分割講義） ①「発掘ゼミ！！」－モノさんぽって何？－（DVD） ②地域の人口減少と『関係人口』の活用 ・日本が直面するこれからの人口減少社会 ・移住定住政策と交流人口拡大政策の限界 ・第3の人口「関係人口」－地域の枠組みを超えたリソースの活用 グループワーク（ジグソー、各種調査など）
10回目	課題2の中間発表（クラス単位）
11回目	アドバイス講義（2分割講義） ①分析手法：クロスSWOT分析 ②課題2のポスター発表：形式、ポイント、ループリック グループワーク（ジグソーと調査、発表準備など）
12回目	グループワーク（調査と発表準備）
13回目	グループワーク（調査と発表準備）
14回目	課題2のポスター公開発表（2クラス合同）と学生による相互評価
15回目	まとめ（今後の大学生活について）

表 2 グループ構成の例

		課題②グループ					
		②-A	②-B	②-C	②-D	②-E	②-F
課題①グループ	①-A	01	07	13	19	25	31
	①-B	02	08	14	20	26	32
	①-C	03	09	15	21	27	33
	①-D	04	10	16	22	28	34
	①-E	05	11	16	23	29	35
	①-F	06	12	18	24	30	36

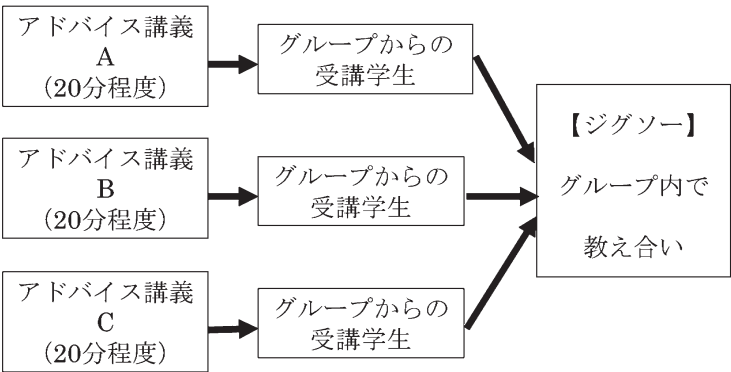


図 1 アドバイス講義からジグソーへの流れ

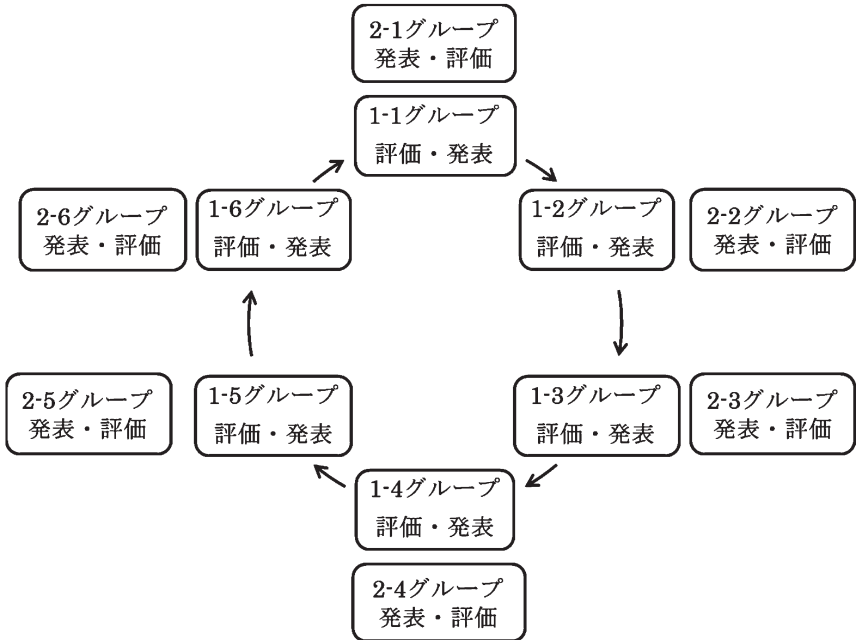


図 2 プレゼンテーションの方法

1 クラスと 2 クラスが交互に発表する。発表と評価をした後、1 クラスは 2 クラスの次のグループへ移動する。これを課題 1 では 3 回の移動、課題 2 では 2 回の移動で実施した。

## 発表グループ( ) 評価グループ( )

	2点	1点
発表 (話し方)	<input type="checkbox"/> 聞き取りやすい声の大きさ	<input type="checkbox"/> 声が小さい
	<input type="checkbox"/> メモができる速さ	<input type="checkbox"/> メモできない速さ
	<input type="checkbox"/> 聴衆をみながら話す	<input type="checkbox"/> 聴衆を無視して話す
	<input type="checkbox"/> 発表時間10分以上	<input type="checkbox"/> 発表時間10分未満
構成	<input type="checkbox"/> 見出し・図表タイトルあり	<input type="checkbox"/> なし
	<input type="checkbox"/> 見やすい・丁寧な文字	<input type="checkbox"/> 小さい・見にくい文字
	<input type="checkbox"/> 整った表示	<input type="checkbox"/> 縦横がずれている
調査	<input type="checkbox"/> 3つ以上の調査実施	<input type="checkbox"/> 2つ以下の調査実施
内容	<input type="checkbox"/> 事実を3つ以上	<input type="checkbox"/> 2つ以下
オリジナリティ	<input type="checkbox"/> 主張・意見あり	<input type="checkbox"/> 主張・意見なし
合計点(20点満点)=		

## コメント


図3 プレゼンテーションのループリック

	2点	1点
文字数	2000以上	2000未満
構成	事実(data)や図表あり	1つ不足
	適切な見出し(章・節)、図表タイトル	見出しや図表タイトルなし
現地調査	訪問あり(訪問日・店舗名を明記)	なし
多様な調査	公式Web、新聞記事、書籍など 多様な引用・参考文献の使用と明記	1種類だけ
オリジナリティ	主張(意見)あり	なし
本文の書体	文字 MS明朝 10.5pt 文字以外 Century 10.5pt	指定外
誤字脱字	なし	4以上
体裁	整った記述	縦横にずれ 文章の書き始め
提出	期日を守る	
完全にコピー＆ペースト(同じ記事やレポートの存在) -10点		
期日に遅れて提出 -20点		
合計点(20点満点)=		

図4 レポートのループリック

## 2. 教員の役割

教員は、授業開始時に出席を確認、グループワークを支援、学生を評価する役割を担った。アドバイス講義は、2～3名が同時に各自の専門分野について20分程度で実施した。教員の専門分野は基礎教育、物流、マーケティング、経営、会計、観光だった。評価は各課題でのグループワークとプレゼンテーション、個々に作成したジグソー資料、各課題のレポートであり、学生の相互評価の結果とあわせて評価した。評価には、学生と同じループリックを用いた。

多くの学生は大学に至るまで、評価される側であったといえる。さらに、学生たちは最終的に単位を取得する必要がある・評価されるという同じ立場にある。そのため、ループリックが提示されていても、同じ立場の仲間に対して主観的な評価や相対的な評価、感情的な評価を行わないとはいえない。つまり、客観的な評価ができていくかについては疑問が残る。そこで、教員による評価と組み合わせることで、客観的な評価を確保する必要があった。

## IV. 授業後の学生の感想

授業についてのアンケートから「良かったところ、継続してほしいところ」の自由記述を学生の記述のまま以下に示す。

- ・この授業でコンビニの実態や商店街の実態を知ることができたし、班で行うので協調性が改めて大切なんだなと思いました。
- ・グループで協力しあいながらポスターを作るのはとても良かった。
- ・この授業ではグループで活動をし、その中で得られる他者の意見や知識がありとても楽しかったです。また、友達も増えて嬉しかったです。
- ・グループワークで発表する機会が多く、高校で身につけた発表の力が活かされたと感じています。しかし、高校のときは一人での発表

が多かったので、グループで話し合ったり意見をまとめたりするのは難しかったです。ですが、コミュニケーションを図ることの難しさを知るとともに、学びにもつながったので、これからの生活に生かしていきたいです。

これらのことから、学生はグループワークのメリット、デメリットを経験しながらも、楽しみながら活動できたと推察される。課題の難易度は、68%が適切だったと回答しており、易しかった・かなり易しかったと合わせると、92%となった。授業内容の意義や必要性を認識した学生は79%であった。本授業に対する学生の評価は、「非常に良い (23%)」「良い (42%)」「普通 (34%)」を合わせて99%となり、学生にとって有意義だったといえる。

## V. 今後の課題

スタディスキルⅡについて、2019年度の実施から次のような課題が挙げられる。

### ①教員の打合せ方法

学生の感想からも事前打合せとグループメールだけでは、十分でなかったことがわかった。初めての科目ということで、授業の展開も手探りであったことは否めない。さらに、教員間での共通理解が十分であったともいえない。したがって、授業内容が変化あるいは複雑化する時点での打合せを行うことが望ましいといえる。

### ②学生の活動に論文を読む、データ分析を熟考するなどアカデミックな面の強調方法

Web 調査はHPや新聞の記事に留まる傾向にあった。また、データ分析を紹介しても学生が十分に活用しているとは言い難かった。論文調査はデータ分析の結果を盛り込んだプレゼンテーションやレポートとなるような仕組みにする必要があると考えられる。

### ③アドバイス講義を2年次以上の専門科目につながるような落とし込み方

20分程度のアドバイス講義で、内容を完全に理解できることは期待できない。しかし、学んだ内容が専門科目の何につながるのかを提示することは可能である。よって、アドバイス講義と専門科目との関係を資料に明記したり、口頭で提示したりする必要があるといえる。

### ④次年度以降は再履修者の対応

2019年度の新カリキュラム開始に伴う開講のため、再履修者は存在しなかった。しかし、今回、出席回数を満たさなかった5名に失格評価を行っている。2年次以降のどの時点で再履修をするか不明であるが、特別な対応をする必要はないのではないだろうか。なぜならば、大学生活への適応を目的とするスタディスキルⅠとは違い、専門科目への導入となることを目的としているからである。この点については、さらに、検討を要するといえる。

### ⑤授業担当者が毎年変わることへの対応

スタディスキルⅠが大学基礎講座、アカデミックリテラシーと名称変更しながら、授業計画を練り上げてきている。その結果、一定のマニュアルが出来上がっているといえる。したがって、スタディスキルⅡにおいても、可能な限り早い時期にマニュアルが確定するように努める必要がある。

スタディスキルⅡは初年次教育から専門教育への橋渡しとなる科目である。さらに、流通科学部の全教員がいつかは担当となる科目でもある。学生にとってのみならず、教員にもやりがいのある科目となることが望まれる。

## VI. 謝辞

本科目の設定にあたり、ご尽力いただいた中

村学園大学流通科学部の教員の皆様、中村学園大学の事務局に感謝申し上げます。また、外部講師として貴重なデータを示しながらの講話と公开发表へ参加いただいた福岡市経済観光文化局総務・中小企業部地域産業支援課主査（地域連携担当）中牟田良博様、ならびに公开发表に参加いただいた皆様にお礼申し上げます。そして、本科目を受講し、一緒に授業をつくり上げ、授業についてのアンケートに回答していただいた学生の皆さんにも心より感謝いたします。

## VII. 注釈

注1) 初年次教育：高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたものの。

引用：文部科学省（2016）、大学における教育内容等の改革状況について（平成28年度）

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336.htm)（参照 2020-02-27）

注2) ジグソー：ある内容を教えられるまで完全に習得する責任感を育成し、それぞれの学生が注目される、あるいは、リーダーとなる機会を与える学習方法である。

参考：E.F.Barkley, K.P.Cross, C.H.Major（著）、安永悟（監訳）、「協同学習の技法 大学教育の手引き」、ナカニシヤ出版、128-133、2015年

注3) ピア・レスポンス：学習者が自分達の書いた作文をお互いに読み合い、よりよい作文にすることを目標に話し合い活動をするというものである。ここで重要な点は、この活動がグループ内で協力的なかたちで行われるという点である。

引用：池田玲子（1998）、ピア・レスポンスによる作文推敲、日本語教育方法研究会誌 5（1）、18-19.

注4) ピア・エディティング：学生が相互に小論文やレポートなどを批判的に読み、コメント



を交換する方法である。文章に対して分析的評価能力を身に付けることができる。

参考：E.F.Barkley, K.P.Cross, C.H.Major (著)、安永悟 (監訳)、「協同学習の技法 大学教育の手引き」、ナカニシヤ出版、201-204、2015年

## VIII. 文献一覧

文部科学省 (2017)、高大接続改革の動向について、  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/02/15/1381780\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/02/15/1381780_3.pdf) (参照 2020-02-27)

文部科学省 (2014)、大学における教育内容・方法の改善等について、

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/index.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/index.htm) (参照 2020-02-27)

文部科学省 (2016)、大学における教育内容等の改革状況について (平成28年度)

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336.htm) (参照 2020-02-27)

E.F.Barkley, K.P.Cross, C.H.Major (著)、安永悟 (監訳)、「協同学習の技法 大学教育の手引き」、ナカニシヤ出版、128-133、2015年  
池田玲子 (1998)、ピア・レスポンスによる作文推敲、日本語教育方法研究会誌 5 (1)、18-19.

E.F.Barkley, K.P.Cross, C.H.Major (著)、安永悟 (監訳)、「協同学習の技法 大学教育の手引き」、ナカニシヤ出版、201-204、2015年